

琵琶湖の要港

朝妻湊跡

天野川河口の南岸の先端部には、現在天野川舟溜(朝妻漁港^{あさづま})がつくられていますが、その一帯の湖岸には奈良時代から中世にかけての遺物が散布する朝妻湊遺跡^{みなと}があります。「朝妻湊」は中世以前の湖東の要津(港)として多くの文献に記されています。東山道の美濃方面あるいは長浜・北陸方面に通じる港で、ここから大津あるいは坂本の港を経て都とつながる航路となっていて、大いに賑わいをみせていました。とくに畿内と東国とを結ぶ湖上ルートは朝妻湊が琵琶湖の入口です。また、隣接して筑摩御厨^{ちくまみくりや}がひかえていることから古代以来の重要な港と考えられます。しかし、天正年間(1573~92)に「長浜湊」が、慶長8年(1603)には、彦根藩によって「米原湊」が開かれると次第に衰退していきました。この朝妻湊の具体的な位置については明らかではなく、遺物散布地と朝妻湊との関連については、今後の調査課題です。

『万葉集』に「近江の海、八十の湊」と詠まれた琵琶湖のなかでも、朝妻湊は『延喜式』^{えんぎしき}(927)に塩津(西浅井町)、海津・勝野(高島市)とともに公認港として記載されています。東山道・北陸道の接点^{とうさんどう}にあり、湊の北を流れる天野川の舟運も利用できました。



